

平成18年度 尾瀬傷病事故統計

(尾瀬山の鼻・尾瀬沼ビジターセンター対応記録等から)



財団法人 尾瀬保護財団

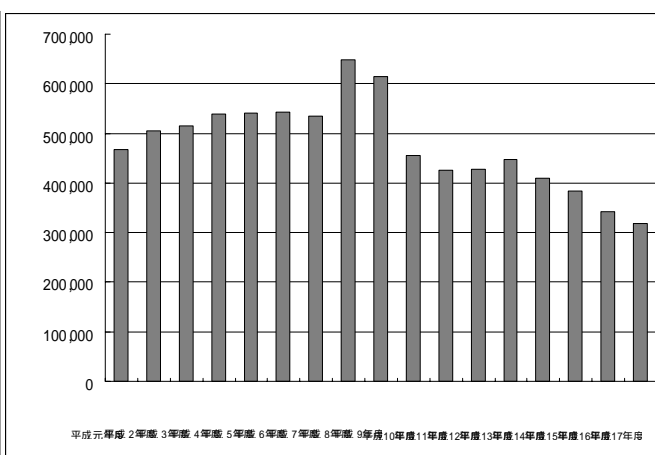
目 次

1	入山者数の状況	1
2	傷病事故の発生状況	2
(1)	年別発生状況	2
(2)	地域別発生状況	2
(3)	原因別発生状況	3
(4)	シーズン別発生状況	3
(5)	月別発生状況	4
(6)	年齢別・男女別発生状況	4
(7)	傷病者の居住地別発生状況	5
(8)	グループ人数別発生状況	6
(9)	傷病事故の通報状況	6
3	救助活動	7
(1)	救助隊出動状況	7
(2)	ヘリコプター活用状況	7

1 入山者数の状況

尾瀬が利用できる季節は5月大型連休後から10月中旬までであるが、同期間において環境省は各登山口に計測センサーを設置し、年間の尾瀬入山者数を計測している。この結果によれば、尾瀬の入山者数は平成2年度から平成7年度まで50万人台前半を推移し、平成8、9年度にはテレビ等マスコミでの頻繁な尾瀬紹介により60万人台前半に上昇した。しかし、平成10年度には不景気と週末の悪天候から約46万人に減少し、その後も40万人台で推移してきたが、平成17年度には平成元年からの計測後最低の約31万8千人という結果となった（平成18年度入山者数データについては環境省の公表後に掲載いたします）。

年度	入山者数 (人)	対前年比 (%)
平成元年	467,090	
平成2年	505,840	108.3
平成3年	515,090	101.8
平成4年	539,790	104.8
平成5年	540,264	100.1
平成6年	542,058	100.3
平成7年	534,196	98.5
平成8年	647,523	121.2
平成9年	614,317	94.9
平成10年	455,409	74.1
平成11年	425,807	93.5
平成12年	428,446	100.6
平成13年	448,041	104.6
平成14年	409,942	91.5
平成15年	384,251	93.7
平成16年	341,558	88.9
平成17年	317,847	93.1
平成18年		



尾瀬の入山者数の推移 (環境省のデータから作成)

2 傷病事故の発生状況

(1) 年別発生状況

平成18年度に尾瀬保護財団が管理する尾瀬山の鼻ビジターセンター（群馬県より管理受託）、尾瀬沼ビジターセンター（環境省より管理受託）職員が出動した傷病事故は、80件であった。なお、ビジターセンターが関与しておらず、集計値にも反映していないが、残雪期に道に迷った死亡事故が1件発生している。なお、以後の統計数値はビジターセンターが関与した傷病事故のみを取り扱っている。

年度	区分	発生件数 (件)	遭難者(人)			
			死亡	行方不明	負傷	計
8年度		16			16	16
9年度		33	2		31	33
10年度		49	4		45	49
11年度		55	1		54	55
12年度		70	2		68	70
13年度		46			46	46
14年度		51	2		49	51
15年度		33	1		32	33
16年度		46	1		45	46
17年度		59			59	59
18年度		80	3		77	80

(2) 地域別発生状況

地域別では尾瀬ヶ原、鳩待峠～山ノ鼻、至仏山の順で発生件数が多く、山の鼻ビジターセンター管轄内（主に尾瀬ヶ原を中心とするエリア）での事故が目立った。

地域別	区分	発生件数 (件)	発生 比率	遭難者(人)			
				死亡	行方不明	負傷	計
鳩待峠～山ノ鼻		25	31.2	1		24	25
尾瀬ヶ原		31	38.6			31	31
三条ノ滝		0	0				0
大江湿原・沼北岸 (VC周辺を含む)		2	2.5			2	2
尾瀬沼南岸		1	1.3			1	1
沼山峠～尾瀬沼		2	2.5			2	2
大清水～尾瀬沼		1	1.3			1	1
尾瀬沼その他の地域		2	2.5	1		1	2
燧裏林道		1	1.3			1	1
アヤメ平		2	2.5			2	2
至仏山		10	12.5	1		9	10
燧ヶ岳		2	2.5			2	2
不明		1	1.3			1	1
合計		80	100.0	3	0	77	80

(3) 原因別発生状況

傷病事故に至った原因では、依然として木道での転倒事故が65.0%と圧倒的に多く、木道整備区間が多い尾瀬地域の特徴を示している。今年度は積雪が多く、木道上に雪が遅くまで残っていたことも、転倒事故発生の大きな原因となっている。

死亡事故で「その他」とした1件は、発達した低気圧が発生し全国的に大荒れの天気となった日に、落下してきた枝が入山者に当たり亡くなったものである。「疲労・低体温」で死亡した1件も同日に発生しており、悪天候時の危険性を示した結果となった。

原因別	区分 発生件数 (件)	遭難者(人)				
		死亡	行方不明	負傷	救出	計
木道上の転倒	52			43	9	52
歩道上の転倒	5			1	4	5
病気	8	1		2	5	8
疲労・低体温	10	1		9		10
落石	0					0
道に迷い	0					0
雪崩・雪渓崩落	0					0
落雷	0					0
徒渉失敗	0					0
その他	4	1		3		4
不明	1				1	1
合計	80	3	0	58	19	80

(4) シーズン別発生状況

シーズン別では春・秋に比べて夏での傷病事故が多い結果となった。

しかし、救急隊が出動した件数は春・夏ともに8件であり、春山での事故は重大なものとなる割合が高い。夏山でも救助隊出動には至らないものの、転倒等による負傷事故が多発し、一歩間違えれば大きなケガにつながる可能性を含んでいる。

シーズン別	区分 発生件数 (件)	遭難者(人)				
		死亡	行方不明	負傷	救出	計
春山(4・5・6月)	27	1		18	8	27
夏山(7・8月)	36			28	8	36
秋山(9・10・11月)	17	2		12	3	17
合計	80	3	0	58	19	80

(5) 月別発生状況

月別発生では6月が25件(31.3%)と最も多く、次いで7月が23件(28.7%)となりミズバショウ、ニッコウキスゲの入山者の多い時期に対応した結果となった。また、6月の残雪とともに7月に雨が多かったことで、木道が滑りやすい状態となり事故発生につながったものと考えられる。

原因別	区分	発生件数 (件)	遭難者(人)				計
			死亡	行方不明	負傷	救出	
	4月	0					
	5月	2	1			1	2
	6月	25			18	7	25
	7月	23			16	7	23
	8月	13			12	1	13
	9月	3			2	1	3
	10月	14	2		10	2	14
	11月	0					
	合計	80	3		58	19	80

(6) 年齢別・男女別発生状況

年齢比は、10～30代が12.7%、40代以上が81.0%で、入山する年齢層に比例して中高年の傷病事故が高い割合を占めている。男性は60～70代、女性は50～60代の事故が目立ち、軽度のケガだけでなく救助隊によって搬送される重傷のケースも少なくない。男女比では女性が6割強となり、例年女性の方がやや多い傾向にある。

年代別	区分	男性(人)				比率 (%)	女性(人)				比率 (%)	男女計 (%)		
		死亡	行方不明	負傷	救出		計	死亡	行方不明	負傷			救出	計
10代				1		1			4	1	5			
20代						0			2		2	18.4	12.7	
30代						0			1	1	2			
40代				2		2			2	1	3			
50代				5		5			13	4	17			
60代	1		7	3	1	11			9	3	12	73.5	81.0	
70代以上	1		7	2	1	10			2	2	4			
不明	1					1	3.3		2	2	4	8.1	6.3	
合計	3	0	22	5	3	30	100.0	0	0	35	14	49	100.0	100.0
比率	38.0%						62.0%						性別不明1名	

(7) 傷病者の居住地別発生状況

傷病者は東京都・埼玉県・神奈川県が約半数を占めている。関西以西からの入山者の救出を4件行ったが、遠方から訪れている場合、事故後の帰宅が大変困難になる。

区分 都道府県別	死亡	行方不明	負傷	救出	計
秋田県			1		1
福島県	1			1	2
茨城県			2		2
栃木県			2	1	3
群馬県			1	1	2
埼玉県	1		9	1	11
千葉県			2	2	4
東京都	1		16	5	22
神奈川県			9	1	10
新潟県			1		1
山梨県			1		1
静岡県			1		1
愛知県				2	2
京都府			1	1	2
大阪府			1		1
兵庫県			1		1
奈良県			1		1
広島県			1		1
島根県				1	1
福岡県			1		1
不明			7	3	10
合計	3		58	19	80

(8) グループ人数別発生状況

グループの人数は把握できなかったため、グループの形態別にとりまとめた。家族や友人などで構成されるグループの割合が58.7%と高い結果となった。ツアー客の場合、軽度な症状は添乗員やガイドが対応しているものと思われ、実際にはこれより多いものと考えられる。単独の場合、重大な傷病事故が発生しても早期の段階でセルフレスキューや救助要請ができないことが多く、場合によっては命にかかわることも起こりかねない。

区分	発生件数 (件)	遭 難 者 (人)				
		死亡	行方不明	負傷	救出	計
単独	7	1		5	1	7
グループ	47	2		37	8	47
ツアー	18			12	6	18
不明	8			4	4	8
合計	80	3		58	19	80

(9) 傷病事故の通報状況

通報状況は、本人あるいは同行者が、尾瀬山の鼻または尾瀬沼ビジターセンターへ来所して口頭で行ったのが、それぞれ25件(31.2%)、24件(30.0%)と多く、他人(通行人)からや、山小屋・救助隊からの通報も各10件(12.5%)あった。

区分 通報別	通 報 者 (件)							比率(%)
	本人	家族	同行者	他人	山小屋 救助隊	不明	計	
口 頭	25		24	10	10	11	80	100.0
携帯携帯								0
電 話								0
アマチュア無線								0
その他無線								0
不 明								0
合 計	25	0	24	10	10	11	80	100.0
比 率	31.2	0	30.0	12.5	12.5	13.8	100.0	

3 救助活動

(1) 傷病者対応時の出動状況

例年に比べて傷病事故発生件数が増加した中で、特にビクターセンターで対応した件数は77件と昨年度の2倍以上であった。担架搬送などによる救助隊の出動もここ数年で最も多い結果となった。

年度 \ 出動区分	消防	救助隊	ビクターセンター	一般	合計	発生件数 (件)
平成8年度	2	4	12		18	16
平成9年度	12	20	10		42	33
平成10年度	8	33	16		57	49
平成11年度	9	28	27		64	55
平成12年度	11	18	45		74	70
平成13年度	9	21	22		52	46
平成14年度	9	14	31		54	51
平成15年度	8	10	19		37	33
平成16年度						46
平成17年度	16	12	35		63	59
平成18年度	17	22	77		116	80

(2) ヘリコプター活用状況

傷病事故80件のうち8件(10.0%)でヘリコプターを依頼し、8人(2遺体を含む)を搬送した。今年度は事故発生件数が非常に多かったが、ヘリコプターでの搬送は例年並みであり、担架での搬送が多かったことがわかる。

年度 \ 区分	依頼件数 (件)	負傷者救助 (人)	病人等救助 (人)	行方不明 (人)	遺体収容 (体)
平成8年度	2	1	1		
平成9年度	5	3	1	1	
平成10年度	3	3			
平成11年度	5	5			
平成12年度	7	5	1	1	
平成13年度	6	6			
平成14年度	6	4	1	1	
平成15年度	6	4	1		
平成16年度	7	7			
平成17年度	12	8	4		
平成18年度	8	3	3		2